早稲田大學東洋哲學會 第三十九回大會

〈日　時〉六月十一日（土曜日）午後一時より
〈會　場〉早稲田大學戸山キャンパス 三十三號館 三階 第一會議室

〈研究發表および講演要旨〉

【研究發表】

『心性罪福因縁集』巻中第十三話と傳源信『法華經讀誦觀』
―平安後期『法華經』讀誦法の一側面―

崔　鵬偉

『心性罪福因縁集』は、『往生拾因』『今昔物語集』に引用されていることから、平安後期の淨土思想や説話文學の研究において注目されてきた。しかし、その思想內容については未詳のところが少なくない。『心性罪福因縁集』の譯註作業を進める中、巻中第十三話は、源信假託の『法華經讀誦觀』と內容的に近いことが判明した。そこで本發表では、まず兩者の本文比較を行うことによって、その影響關係を明らかにしたい。また前者は大乘經典全般の讀誦を說くのに對して、後者は『法華經』の讀誦に特化している理由を檢討したい。

南宋における華嚴宗章疏の刊刻と教學の展開――智儼撰『孔目章』を例に

櫻井　唯

中國華嚴教學は唐の智儼（六〇二～六六八）によって基礎が築かれたが、唐末五代の戰亂の影響により、宋初にはその著作はほぼ散逸していたという。智儼の思想が再び注目を集めるのは南宋の紹興年間（一一三一～一一六二）以降のことで、北宋期に高麗から復還していた智儼の著作はこの時期に至って相次いで刊行された。本發表では、智儼撰『孔目章』の註釋書である撰者未詳『明宗記』（一一七一年成立）と、新出資料・宋版『孔目章』巻四後序（國寶稱名寺聖教のうち）の關係を檢討し、教學の展開が佛典の開板活動に與えた影響を論ずる。

古靈寶經に於ける『法輪罪福』の位置付け

林　佳惠

『法輪罪福』は、東晉末から劉宋にかけて作られた、古靈寶經と呼ばれる經典の一つである。劉宋の道士陸修靜は、これを「元始舊經」に分類しているが、天眞が仙公に降って教法を授けるという、「仙公所受」の「新經」のような內容構成の經典であり、その設定には「新經」との繫がりが窺える。一方、天眞が說く教法では、他の「元始舊經」との關連も指摘できる。本報告では、『法輪罪福』と他の經典との關りや、この經典が示す經典觀等について考察し、そこから『法輪罪福』が古靈寶經の中で、どのように位置付けられるかを考える。

張九成『孟子傳』考察――心の「幾」を中心に

松野　敏之

張九成（一〇九二～一一五九）は朱熹によって禪學に傾倒したと批判され、南宋末以降影響力の凋落した道學者である。しかし、その著書『孟子傳』は朱熹『孟子集注』が世に出る以前の書であり、南宋道學の『孟子』解釋の一つの方向性として注目に値するものである。先行研究は多くないながら、張九成の解釋には「人主の心術」重視のあることが指摘されている。本發表では、さらに張九成が心の動きに注目しながら『孟子』を解釋していること、そこには「幾」への注目があるということをとりあげてみたい。

ガンダルヴァの都城――『根本中觀頌』の意味

齋藤　直樹

龍樹作『根本中觀頌』のなかに三度「ガンダルヴァの都城」が現れる．輪廻に係わる教理上の諸事項などの虛構性がその比喩によって示される．その了解は，その論書で使われる「存在する」という動詞が，反語と假定文を除いて，いかなる主語のもとでもすべて否定されていることによって確認される．その一方で究極的な眞理の條件としての「至高の意味」はそれ自體として涅槃への經路であり，しかも言語的慣行によって示されうることが示唆されている．存在の徹底的否定と解脫の可能性の暗示とのあいだの解きがたい緊張の意味を考察する．

【講　演】

日本古寫經『金剛場陀羅尼經』（國寶本・五月一日經本・七寺一切經本・興聖寺一切經本）について

落合　俊典

日本古寫經の中、書寫年代が一番古い寫經と言えば『金剛場陀羅尼經』である。書風としても歐陽詢・歐陽通の書を髣髴とさせる典雅な古寫經として知られている。奥書に「歲次丙戌年五月、川內國志貴評內知識、爲七世父母及一切衆生、敬造金剛場陀羅經一部、藉此善因往生淨土終成正覺。敎化僧寶林。」とあり、この丙戌が六八六年とされる。ただ、藤本孝一氏は紙背に「天平十八年」と書かれていることをどのように捉えるかと問題提起がなされた。そこで本報告では國寶本の書寫年代を正倉院聖語藏の五月一日經本と比較して解決を目指したいと考える。